

第 33 期第 8 回研究会「テレビ研究における「口述資料」「証言」の可能性～草創期「放送人」の相関関係を抽出する試みを例として～」(放送研究部会企画、東京大学大学院情報学環メディア・コンテンツ総合研究機構共催) 終わる

日時：2012 年 12 月 1 日 (土) 15:00～17:00

場所：東京大学本郷キャンパス 情報学環・福武ホール B2 福武ラーニング・スタジオ 2・3

包括コメント：石田英敬 (東京大学)

研究報告：桜井 均 (元 NHK プロデューサー、立正大学)、三分一信之 (日立ソリューションズ技術開発本部)

討論者：加島 卓 (東海大学)

司 会：西 兼志 (成蹊大学)

参加者：34 名

記録執筆：米倉 律

日本でテレビ放送がスタートして、まもなく 60 周年の節目を迎える。近年、過去の各時代に活躍した当事者や関係者の「口述資料」「証言」など (オーラル・ヒストリー) が、映像、資料の不足を補うものとして、また、新たな角度からテレビ史に光を当ててのものとして注目されるようになってきている。研究会では、「放送人の会」が 1999 年から収集を続けてきた約 170 人分の「放送人の証言」を扱った研究事例を中心に、オーラル・ヒストリーを用いた研究の意義と可能性について議論した。

まず、石田英敬氏 (東京大学) による研究の全体的な方向性やねらいについてのコメントを受けて、桜井均氏 (元 NHK プロデューサー、立正大学) と三分一信之氏 (日立ソリューションズ技術開発本部) から、認知テクノロジーを試験的に用いた分析ツールによる証言のテキスト分析の事例と、草創期のテレビ放送に関わった制作者・関係者の相関関係を可視化する試みについて報告がなされた。一人一人の証言を単独の資料として扱うのではなく、複数の証言を分析対象にすることで、草創期におけるテレビ制作現場がどのようなものであったのかについて制作者達の相関関係を軸に明らかにする可能性が示された。

研究報告に続き、テレビ史に隣接する広告史研究の分野で、戦前から戦後にかけての広告制作者に関する研究を進める東海大学の加島卓氏からのコメントがあり、「口述資料」が持つ当事者性や歴史的制約をどう考えるべきかなど、研究資料として「口述資料」を扱う際の方法論や理解可能性をめぐる指摘があった。会場を交えた議論を十分に展開するだけの時間的余裕がなく、時間配分上の課題も残ったが、今後発展が期待される「口述資料」「証言」を用いた放送史研究、テレビ研究の可能性、課題について、多くの参加者のあいだで一定の理解や共通認識が得られたものと思われる。